

虹の橋

45 年ほど前、ちょうど芦屋で眼科を開業したばかりで、まだ借家住まいをしていたころ、以前済んでいた住人が残していった犬 2 頭を可哀想に思って飼ったのが、我が家とペットとの付き合いの最初でした。ロンとハリーという血統書つき？の雑種はその恩義に応じてか、娘二人の幼稚園の登園のお供をし、幼稚園が済むまで門の前で待っていて、一緒に帰ってくるという日課を忠実に守ってくれました。

この 2 頭が相次いで姿を消した後、コリー、ポメラニアンと常に犬と一緒に生活でしたが、母親が我が家で取り上げたポメラニアンの子を直射日光下にハウスを置き忘れて、殺してしまってから、ペットを飼うのを止めになりました。

ずっと動物と一緒に生活が続いていた二人の娘たちは、高校卒業と同時に渡米しましたが、アメリカでずっと猫と一緒に生活をしていました。下の娘が結婚のためにホノルルからニューヨークに移る際、二ヶ月ほど日本に帰ってきました。その際に連れ帰った猫に刺激されて、娘がアメリカに行った後、我が家でも猫を飼い始めました。最初の猫は向かいのタバコ屋さんから貰ってきたアメリカン・ショートヘア mix のリラ、翌年には右が金眼、左が銀眼のポピー、そして 3 匹目が前回ご紹介したアラスカン・マラミュートのアレックスです。

ポピーは 16 才、リラは 18 才、アレックスは 15 才でこの 3 年の間に次々この世を去りました。いずれも長生きをしたいい子ばかりでした。

下の娘の猫は 21 才まで生きましたが一昨年大往生を遂げました。

上の娘は動物好きが高じて、MBA まで取りながら一念発起してワシントン州立大学の獣医学部に入り直し、現在シアトル郊外で獣医をしています。家は犬 3 匹、猫 4 匹、亭主一人の大所帯です。

さて、前回犬の十戒をご紹介しましたが、とても反応が大きく、多くの方からお手紙をいただきました。どうやらロータリーの話よりも好評のようで複雑な心境です。

今回は約束通り「虹の橋」をお届けします。この詩はインディアンの間で伝わった詩といわれていますが作者は判りません。

人間に愛されながら先立った動物は、天国に行く虹の橋の前で、主人が来る日まで待っているという詩です。またこの詩には「虹の橋で」という別のバージョンがあり、動物に縁のなかった人でも本来は生涯を共にするペットがおり、死ねば共に虹の橋を渡って天国に行くという話です。

私は今のところまだ死ぬわけにはいきませんが、私が可愛がっていた、大勢の動物たちと虹の橋の手前の草原で再開する日がいつかは来ることは確かです。

虹の橋

田中毅 翻訳

天国に行くちょっと手前に、

虹の橋と呼ばれる場所があります。

この世に住んでいるあなたが特別に愛していた動物が死ぬと、虹の橋に行くのです。

そこで、この世を去ったあなたの大切な友は、

草むらや丘を駆け回って遊んでいます。

十分の食物と水と日の光をあびながら、

動物たちは暖かく快適に過ごしています。

病気だった動物も年老いた動物も、健康と活力を取り戻し、

傷ついたり、不具になっていた動物も、
過ぎし日の夢を取り戻したように、強くたくましく甦るのです。
動物たちは幸せに満ちて満足しています。
しかし、一つだけささやかな不満があるのです。
それは、自分にとって一番大切なあなたがここにいない寂しさ、
あなたを残してきた寂しさです。
動物たちは皆一緒に走り回って遊んでいます。
ある日のこと、一匹の動物が突然立ち止まり、
はるか彼方を見つめます。
その瞳はキラキラし輝き、
喜びに満ちた体は小刻みに震え始めます。
突然、その動物は群れから離れて、
緑の草原を飛ぶように走りだします。速く、速く・・・
あなたを見つけたのです。
あなたとあなたの最愛の友はやっと会うことができたのです。
あなた方は固く抱き合い、二度と離れることはありません。
幸せのキスはあなたの顔に降り注ぎ、
あなたの手は最愛の友を優しく撫ぜながら、
信頼に満ちた友の瞳を見つめます。
ずっと前にあなたの前から消え去ったけれど、
あなたの心からは決して消え去らなかつた友の瞳を。
そして、あなた方は一緒に虹の橋を渡っていくのです。

虹の橋で

天国とこの世を結ぶ橋があります。
その橋は豊かな色彩に包まれているので、
虹の橋と呼ばれています。
虹の橋の手前には、
草原や丘や緑に覆われた谷があります。
いとしいペットが死ぬと、
ここにくるのです。
そこには、いつも食物と水があり、
いつも春のような暖かい天気です。
年をとったり病気になった動物は、
再び若さと元気を取り戻します。
不具の動物は元通りの体に戻ります。
そして、一日中一緒に遊んでいます。
橋の側には、皆とすこし様子の違う動物もいます。
疲れきって、飢えて、苦しめられて、愛されたことのない動物たちです。
ほかの動物たちが一匹また一匹と、
特別に愛してくれた人と一緒に橋を渡っていくのを、
物欲しげに見つめているのです。
彼らには特別に愛してくれた人はいません。
彼らが生きていた間に、そんな人は一人も現れませんでした。

しかし、ある日、そんな動物たちが走ったり遊んだりしていると、
橋のたもとの道にたたずんでいる一人の人に気がきます。
生前に動物を飼ったことのないこの人は、
友との再会の情景を物欲しげに見つめます。
この人も、疲れきって、飢えて、苦しめられて、愛されたことがなかったのです。
そんな人が一人ぼっちでたたずんでいると、
愛されたことのない動物が、
なぜ一人ぼっちなのだろうと、不思議そうに近づいていきます。
愛されたことのない動物と、愛したことのない人がお互いに近づくと、
奇跡が起こります。
この世では会う機会がなかった特別な人と愛すべき動物は、
共に生きる運命にあったからです。
今ついに虹の橋のたもとの、
彼らの魂は再開を果たし、
痛みも悲しみも消えて、
二人の友は一緒になったのです。
彼らは虹の橋を共に渡り、
二度と別れることはないのです。